ある試

淡路幼稚園　北條靜子

「學藝會」、二月、三月、私共小學校に附隨する幼稚園の大きな行事。こんな言葉を幼稚園の生活に全然御持ちにならない方も多數ございませうが――。

「園兒に何か一ッ」。ステージに立つて。父兄の前で――。一體どんな遊戯を、どんな唱歌をしたら――。何とかあの何時もの生活をそのまゝステージの上に御覽に入れる事はできないものかと毎年考へさせられる事。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今年は幼兒の生活の一端をこんな風に仕組んで舞臺にのせて見ました。御參考までに。

動物園

舞臺裝置

背景。紙テープを鋏止めして動物園の檻とします。その前に箱積木(或は椅子)を高低をつけて竝べて置きます。

動物。象(一匹)、ライオン(二匹)、猿(三匹)、兎(二匹)、九官鳥(一匹)位を顏だけ白ボールに大きく幼兒に彩色させ、その御面を被せて積木の上に座らせて置きます(動物の種類匹數等は自由に)。

別に入口に近く切符賣場。賣子一人。

そのわきに客呼びの子一人。鈴を持たせてこれだけが舞臺裝置であります。尙動物になる子は、いたずらな剽輕者が良いかと思ひます。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

まづ輕い序曲を彈く中に靜かに幕。

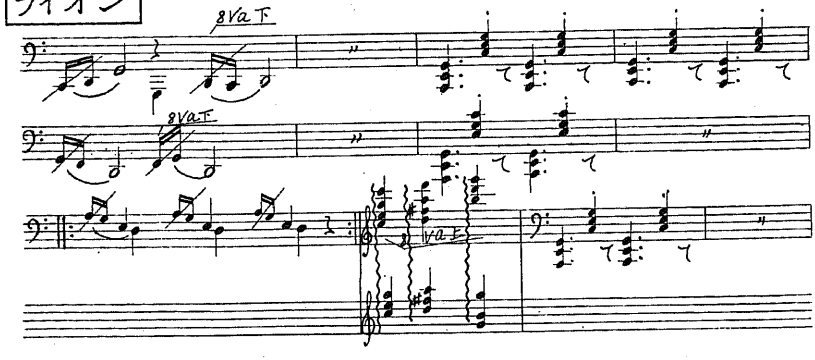
客呼びの子、鈴を鳴らしながら「アーいらつしやいく」。

第一の見物人　三、四人、切符を買つて登場。

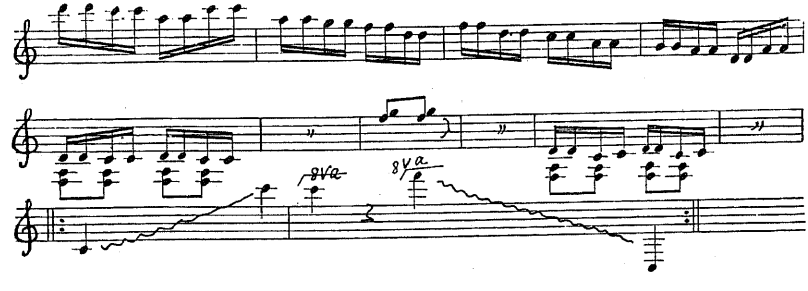
動物園を一わたり見物。動物と思ふ存分たわむれて退場。

同じく客呼びの子の呼び聲。

ライオン



猿



○象さんお鼻をブーラブラ
　あつちへブラリこつちへブラリ

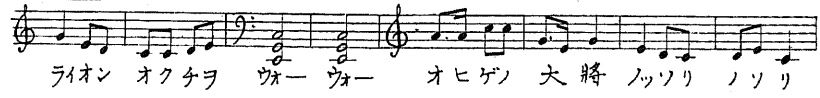
○ライオンお口をウォーウォー
　おひげの大將のつそり〳〵

○猿はひつかくキャッ〳〵〳〵
　目玉グル〳〵歯をむきだして

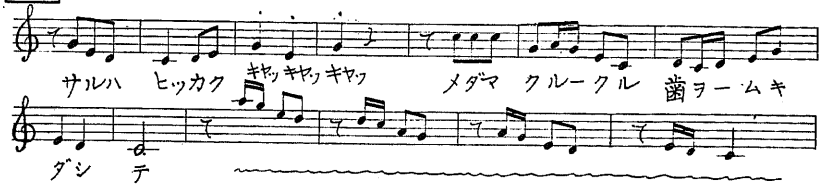
○ピョン〳〵兎は　はね自慢
　お耳を振り〳〵
　ピョン〳〵〳〵ピョコピョン〳〵〳〵

○九官鳥は眞似自慢
　おたけさん　おたけさん

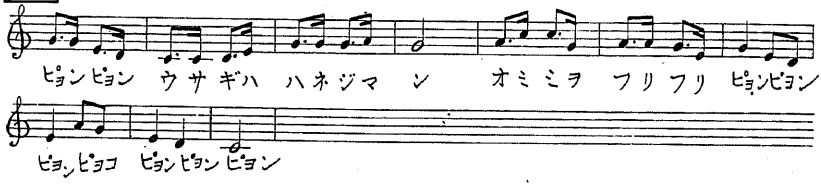
ライオン


ライオン オクチヲ ウォー ウォー オヒゲノ 大將 ノッソリ ノソリ

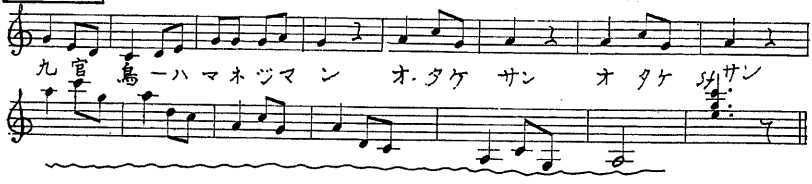
猿


サルハ ヒッカク キャッキャッキャッ メダマ クルークル 歯ヲームキ
ダシ テ

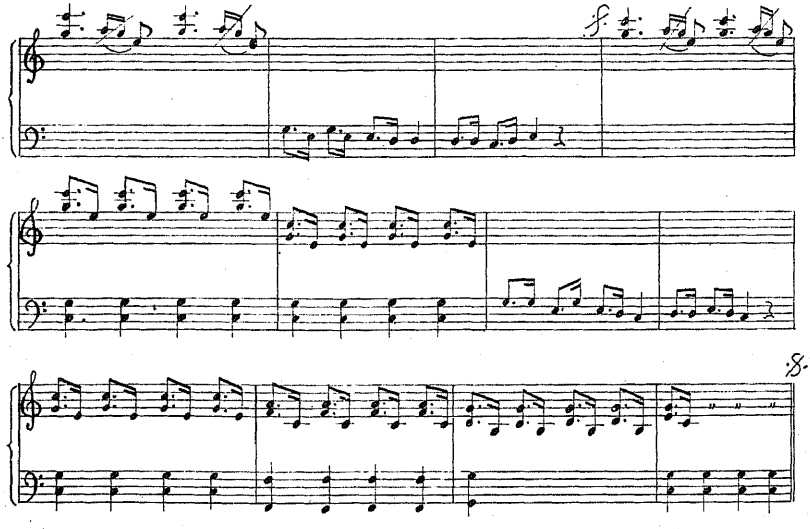
兎


ピョンピョン ウサギハ ハネジマ ン オミミヲ フリフリ ピョンピョン
ピョンピョコ ピョンピョン ピョン

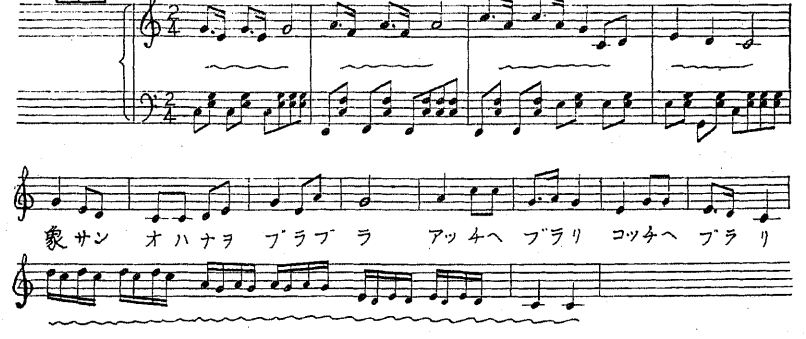
九官鳥


九官 鳥ーハ マネジマ ン オ・タケ サン オ タケ サン

ウサギ



唄 象



第二の見物人　三、四人登場。同じく動物と遊んで退場。
第三、第四　残りの幼兒同樣にして登場。同じく退場。
方法は唯これだけであります。けれどこの間に幼兒の一人一人がどれだけ思ふまゝの、一杯の生活をするかは實に想像以上でございました。
象の鼻をいたずらする。ライオンとは吠えくらべ。仲良しの御猿、兎さんとは御話色々。
殊に人氣者は九官鳥。突飛な言葉を眞似させては大笑ひ。
動物になつた幼兒は幼兒で、見事な鼻の藝當はやる。ウォーく、キャッくくよく啼く事。九官鳥は澄し返へつて大聲で返事をしては見物人を喜ばせる——。全く動物園そのまゝの風景でございます。
これは練習も何もございません。日頃の遊びが舞臺へ移されただけ。人數も役割も一定したものではありませんから見物人になつたり、動物になつたり皆で樂しく遊べる遊びなのでございます。
私の願ふ所は唯これだけ。この生活振りを見ていたゞくだけで充分でありましたがいわゆる「學藝會らしく」する爲にこの遊びを今少し展開致しました。

＊　＊　＊　＊　＊

第一、第二、第三、第四……の見物人の中からライオン、猿、兎、の眞似をする三ツのグループを定め、見物を終へ、直に退場しないで再び舞臺で各々動物の眞似を致します。
◎ライオンの眞似するグループ
幼兒「僕達ライオンの眞似して見よう」
ライオンの曲始まる
幼兒の自由表現。
この曲は吠える音。歩く音。檻をひつかく音。ねころぶ音。からできて居りますから適當に何回か彈き、動物の動作のまゝ退場させます。
◎猿の眞似するグループ
幼兒「さあ僕達猿の眞似よ　ソーラ」
猿の曲始る。
自由表現。

曲はチョコ〳〵歩く音。キャッ〳〵なく音。木に登る音。木から下りる音。から成り同じく適當に彈き退場させます。

兎の眞似するグループ

幼兒「皆で兎になりませう。」

兎の曲。同樣自由表現をもつて。

(この幼兒の臺詞は別に作つたものではございませんが幼兒が自身で申しましたので一寸書いて見ました)。

そして最後に(全部見物を終へて退場した時)。客呼びの子の「いらつしやい〳〵」を合圖に全見物人一齊に登場。動物。見物人。其他。全幼兒揃つて動物の唄を合唱。

靜かに閉幕。

* * * * * *

以上、極くにぎやかな、一つの幼兒劇とでも申しませうか……。

御寒い日の室內遊びにでも御役に立てば幸です。

尙、曲は全部作曲家山本榮先生に御願ひし特に作つていたゞきましたもので、實に幼兒にしつくりしたもの、御參考までに御覽に入れます。唄は葛原先生の歌詩を眞似て、象、ライオン、兎、九官鳥と幼兒と共に作りました、おかしなものでございます。

* * * * * *

見物人の歩みに伴ひ、美しく動くライト。ライトの光に次々と照らし出される滑稽な動物の顏。そして最後に幼兒の合唱と共にくる〳〵廻るライト。ライト。

そんな裝置がもし許されたら、これも立派な舞臺劇になりさう。ピアノをたゝきながら幼兒の嬉しさうな顏を見てふと、こんな事まで考へさせられました。

○ 一 茶

ぶらんこや櫻の花を持ちながら

門の蝶子が這へば飛び這へば飛ぶ

柳からももんぐあゝと出る子かな